
S A M L I O N ~まじっくナイトはご機嫌ナナメ ~

Croissant

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S A M L I O N 　　くまじつくナイトはご機嫌ナナメ　　く

【Nコード】

N 7 6 2 7 Z

【作者名】

C r o i s s a n t

【あらすじ】

とある事件の所為で凶眼で無表情になってしまった普通の青年、
鈴木 太一郎。

ある日、彼は永く共に生きる相棒と出会い、その日から戦いに巻き込まれ、解決に導いてゆく。本人がじえんじえん気付かない内に

……

物語は凄く似ていて全然違う海鳴市から話は始まる……

リリカルなのは勘違い系。スタートです。

ブログ 〜或いは未来のお話〜（前書き）

やあ、

はじめましての方、ここにも来たか？！ 思われていらっしゃる方もよろしくお願いいたします。

このお話はシリアスに見せたギャグであり、ギャグに見せたシリアスというストーリー傾向です。

ついでに言えば更新は亀ですのでご容赦ください。ぶっちゃけ作品自体が筆休めなんで。

それでもよろしければ御進みください。

では……

そんな“彼女”が、敬っている。

そして途轍もない存在感をこちらに放っている。

ヲォヲヲヲヲヲヲヲヲ……

低く、それが唸る様な声を漏らした。

たったそれだけの事で周囲の空気が震える。

その声の圧力によって周辺の土煙が吹き飛び、その巨躯が露となった。

「な……っ!？」

じわりと剣の柄に汗が滲んだ。

緊張等といったレベルではない。

おぼろげな記憶の所為で確かとは言えないが、それでも己が人生で感じた事がないほどの“恐怖”が胸の奥から湧いてきているのだ。

自分が身に着けている鎧は頑丈さに定評のある騎士甲冑。バリア・ジャケット

それも守護騎士として纏っているものであるから特殊なものだ。

だが、そんな護りもあれを相手にするのなら紙くずのようなものだろう。

直感がそう訴え続けているのだ。

あれを相手にするのなら、死ぬか骸かむくろの二つしか道は無いと。

しかし――

「シャマル……ッ」

それも足元には仲間がいた。

意識を失い、うつ伏せに倒れ伏しており、四肢にも力は無い。びくりとも動かないが、まだ生きてはいるようだ。

とは言っても根拠はある訳ではない。

生きていて欲しいという願望混じりなので確率は低いが、もしそうならおいそれと背中を見せる事は出来ない。

不退転の覚悟を決めると、剣に意識を落としてそれを睨みすえた。

ヲ オ オ オ オ オ オ オ ……

自分より一回り以上大きいその身体。

漆黒の甲冑。

目の部分には闘気が籠っている赤い輝き。

——正に、黒騎士。

百戦と剣林を超え、数多を屠ってきた強者だけが持つ気配を放つそれは、

長らく生きた自分を圧倒するそれは、漆黒の守護甲冑を纏った黒鉄の騎士だったのである。

感じられる魔力こそ低いが、そんなもの何の目安にもならない。

伝わるというよりは、叩き付けられるように感じる気がそれを物語っている。

「……キサマ、一体何者だ？」

まるで自分を奮い立たせているようだ。

そう自覚しつつも、彼女はそう問うた。

「な…っ 無礼なっ！！」

しかし反応したのは先程まで自分が戦っていた相手。

魔力を持っているからと襲撃をかけてみれば、その容姿に驚き、次に強さに驚かされたのであるが……

「こちらにおわす方を何方と心得る！！」

やはりこの騎士と知り合い——いや？ どうも主従関係のようだ。

あの顔と声でそう言われるのは複雑な気分であるが、そうも言うてられないし、何より目が離せない。

あれにはそんな刹那の隙という長い時間があれば十分なのだから。

「このお方こそ誰あろう、神代の時代より受け継がれた最高峰の剣槍の使い手！！」

比類なき強さと見通すこともままならぬ大きな器を持つ我が主
「！！」

やあやあ 遠からん 別时空の者は音にも聞け
近くば寄ってしかと見よ

真の武士 真の強者 天上天下に比類なし

剣槍持ちいて数多を薙ぎ

呪力用いて破邪を成す

弱者に御手を 悪業には滅を

勇と優とを力に変えて、彼方から此方へと進撃を成すその御方

御名を聞いて誉ほまれとせよ

その名も——！！！！

——これは偶然が生み出したおとぎ話。

一人の奇運な青年が手にした力が巻き起こす、不幸を打ち
壊す物語——

ION -

嫌ナナメ
)

- SAMUL

くまじっくナイトはく機

巻の壱

「……ヘンな夢見た」

目覚めて一番に零してしまった言葉がこれだ。

独り言というのも物悲しいが、その上 見た夢の事なのだから更に物悲しい。

一人ぼっちは独り言が増えるというけどホントだなあ…等と納得してみたり。

溜息を吐きつつ布団をたたみ、着替えて顔を洗いにゆく。

ニート一歩手前となってしまうはしたけど、流石にニートもヒツキーも御免だし、働かざる者食うべからずの精神はイヤッ ヤメテッー！ お願い堪忍してっー！ ってほど叩き込まれているので家でじっとしてられない。

……つつても、バイトはできないし、食べられる物がエライ限られてるから食材買って自分で作るっちゅーだけなんだけどネ。

はあ…と溜息を吐き、特性のトルマリン壺から漬物を出して刻み、魚に塩ふって焼き、大根おろしを副えておひたしも作る。

卵が目玉焼きなのが献立としては不揃いでナニなんだけど、ちょっと疲れてる事もあって朝っぱらから厚焼き玉子を作る気力が出な

いから仕方がない。

手作り豆腐に酒屋さんから回してもらった添加物ゼロの醤油をちよいと垂らし、炊き立てご飯をよそって出来上がり。

おうっ 良い出来だ。何時でもお嬢さんに行けるぜ。相手いないけどなっっ!!

さびしーなあ……ドチクシヨーム。

……兎も角 食おつと。

板の間に年季の入ったちゃぶ台を置き、適温にした湯を急須に注ぎ、蒸らしている間に料理を並べる。

並べ終わったらようやく座布団の上にどつかと腰をおろし、ぱんつと手を合わせて、

「頂きます……」

ようやく朝ごはんにありつくのだった。

ここまで丁寧になくともいいのに。長年の習性がもの悲しい。

コッソリ二階（その実、ほぼ屋根裏部屋）があるのだけど、外観からして日本家屋っつという築うん百年というふざけた古い家。

そこに、オレ　鈴木　太一郎は一人で住んでいる。

オレの他に家族はいない――

……んだけど、別に死んじゃった訳じゃない。つーか、死ぬシーンが想像できない。

とーさんは見た目ごく普通のサラリーマンだけど、空手と柔道と合気道と剣道と手裏剣術と長刀と弓道で段持ってて、冗談ふつ飛ばしてつおい。強いじゃない。つおい、ね？　ホントシャレになんないんだから。

かーさんも、見た目はそこらにいるパートのオバさんなんだけど、お茶とお花と書道と日舞の師範で、どいう訳か強い。

かーさん曰く、師範なんだから、猪や虎くらい倒すほどの戦闘力がないと……だそうだ。

話聞くまで知らなかったヨ。お茶の師範ってそんなに戦闘力高いんだ……

そんな夫婦は何故か今ブラジルに移住してしまっている。

何でも超うめーコーヒーの豆作るんだそーで……実際、ある程度以上の成果が拳がつてるらしいから怖いんだけど。

時々、テロリストが来るから暇潰せてよいそーだ。何がなんだか

……

で、あと一人っつーか、二人？　いるのがおじーちゃん夫婦。

こっちはどこにいるのかサッパリ解らない。

とーさん達が移住した際、ふらりと旅に出たつきり。

去年、旅先から一枚絵ハガキがきてああ生きてるんだと解ったくらい。

……ただ、その絵ハガキ。ものごつつ若い外人の女の子と腕組んだ写真だったりする。

結婚しました（はあと）

ナニかましやがんですか このジジイは？

知らない内に金髪ハイティーンのお義婆ちゃんが爆誕してたよ。

勘弁して……

こんなエキセントリックな家族らと別れ、オレは一人さびしく日本で生活し続けているのだ。

「ごちそうさま……」

我ながら表情のない声でそう言い、食べ終えた食器を片づける。

囲炉裏まである古式ゆかしい日本の台所の横にデーンと鎮座し

ている最新式のシンク（母の気遣い）で食器を洗い、乾燥機に入れて終了。

ものぐさっポイけど、色々と助かるので文句なんかないし。

ぐおゝんとくぐもったヒーター音を後ろに聞きつつ、今日はこれからどうしようかと思い立つ。

ぶっちゃけ自分は将来の定まっていな今時の大学生。

今日は講義ないし、時間だけがありやがる。

何せこちら進路も未来もビジョンが浮かばず、かといって趣味らしい趣味もない為にやりたい事もないという物悲しいオトコ。

末は二ートかヒッキーか…ってか？ 勘弁してほしい。

両親からドシドシ生活費が振り込まれてくるんだけど、流石にそのまま脛齧りを続ける気はないぞ？

とは言つものの、バイトすら見つけれないアホタレなのだよねー……いや、体質が体質だからしょーがないんだけど。

オレを困らせている体質の一つが、添加物アレルギーー。

何だか知らないけど、化学調味料を全然受け付けられない体なのだ。

よって外食なんか夢また夢。寿司とかなら高い店だったら大丈夫だろうけど、回転寿司はダメ（醤油でひっかかる）。お金はあるのだけど、無理に豪勢な食事がしたい訳じゃないから行きたくない。

で、結局は自炊。

腕上がったぞ？ 何時でも家庭料理店出せるほどになあ。どーせ客なんて来ないだらーけど。ちくしょーめ……

二つ目の困った体質（？）が、オレの顔。っーか表情。

殆ど表情が変わらず、怯えさせるに任せている。
感情が顔に出せなくなっているんだよなー コレが……

おもいつきり怯えられるしー

女の子にも泣かれるのが普通だしー

どつかのおかーさんなんかオレ見た瞬間、怯えた顔で自分の子供庇うんだぜ？ 泣けるったって泣けるったって……

幸い、近所の人は慣れてくれてたから良かったけどさー……

こんなW体質ダブルの所為で友達なんて殆どいなかったし、彼女なんて……っつ……

級友がカッポーになったのを報告されたのが一番最近の色恋沙汰なのさ。ふふ…鈴木家はオレの代でオシマイかなー あははのはー

ドチクショーめ……

ついでだから洗濯をする事にして、服やらシーツやらを洗って干す。

真っ白になったシーツをパンつと広げた時、何か妙な達成感を感じてしまう。

こんな事で充実感を感じちゃう自分が悲し過ぎる。

ちくしょーっつ　みーんなお前が悪いんだーっつっ！！

八つ当たり気味にぎろりと母屋の側らにある蔵を睨みつけるオレ。
いや　ある意味、八つ当たりでも何でもない事実だったりするんだけどな。

その昔……

正確に言うところの十年前。

一人家で留守番をしていたオレは、暇にあかして蔵に忍び込んだのだ。

まー感覚的にいえば宝探しっヤツ。ガキ時分、一度はやってしま
う恥ずかしいアレだ。

中の暗さもなんのその。

色々珍しい置物やら何だかよく解らない掛け軸やらをいじったりして遊んでいた訳だ。

——その時、床に微かな光を見つけてしまった。

何だろうと近寄ってみたら、床に取っ手があつてその横に小皿くらの大きさの円と三角が重なったヘンなものが光りながらゆっくりと回っているではないか。

ガキのオレは思ったね。

まさか、この下に。の槍が！？ ……と。

いや だってさ、蔵の床に地下への扉があつて、見るからに不思議な力が働いてるんだよ？

当時のオレの知識からすれば、当然ながら思い浮かぶのはあの槍と トラしかないじゃん？

今だったらんなモン見つけたら、見なかった事にして埋めちゃうけど、当時のオレはおもつきしガキ。

うわっ 何だこれっ！？ って不用心に近寄って触りやがったんだ。

瞬間、床がぱーんと開き、オレは地下に落っこちた。

いや痛かった。

どれくらい高かったか知らないけど、あちこち打っ付けて痛くて泣いたよ。マジ泣きだ。

そこっ 情けない言うな！！ マンガだったら兎も角、実際に落っこちたガキなんてそんなもんなの！！

と、兎も角、しばらく、しくしく泣いて、いい加減落ち着いてから顔をあげたら――

そこに光る鎧があった。

そりやびつくりした。落っこちた事も痛さも吹っ飛ぶつてもんだで、オレは元から考えなしだし、ガキだった事もあって、すっげっ かけー と近寄っちまった。

マンガ的にもホラー映画的にもやっちゃいけない行為であるにも拘らず、だ。

瞬間、その鎧はパカーンと縦に割れた。

それだけだったらまだ良かったのだけど、次の瞬間、ものすごい衝撃がオレの胸を打った。

そりや当然だろう。何せオレの胸にはぶっとい釘（杭？）が突き刺さっていたのだから。

確認できてしまった瞬間、脳に伝わったその感覚。痛み。

今までの人生でこれだけの痛みを感じた事があっただろうか？
いや無い！！

そう反語で返してしまうほどの激痛が走り、オレはあまりの痛み
に粗相までしちゃって意識を飛ばした。

とらかと思ったら まさかの石喰い……

等という感想を最後に。
今思えば余裕あんな。当時のオレ……

で、帰宅した両親とおじーちゃんが見つけたオレは、何故か蔵の
前に寝っ転がっていたらしい。自力で出たのか、誰かが出してくれ
たのかサッパリだけど。

まあ、あの時は『死んD A ！！』と思っだし、生きてたんだから
それはそれで良かった（ズボンとパンツ濡れてたけど）と思っただ
けど……

何故かその時から感情を顔に出すと胸に激痛が走るようになって
しまっていた。

痛いなんてもんじゃない。あまりの痛みで呼吸不全になり、その
所為で苦しさまで付加されるのだ。

それだけじゃなく、添加物アレルギーまで発症したもんだからさ

あ大変。

ハンバーグだの、カレーだの好物をレストランとかファミレスで食べられなくなったと知った時の絶望つたらもお……

おまけに喜んだり泣いたりもできなくなってるわと、正しく地獄のような日々が始まったのだ。

尤も、カーさんがド器用だったおかげで食生活に不便はなかった。

化学調味料が駄目なら、使わなきゃいいんでね？ とナチュラリストに転身。カレーもスパイスから自分で混ぜて作り始めたし、ハンバーグも調味料やスパイス、そして肉の素性がはつきりしてりや困る事なんてなかった。

ただ、学校は変わらざるをえなかったんだけどネ……

だって給食が食べられなくなったし、友達が離れちゃったから居心地が悪過ぎてさ……

いやだって、感情が顔に出ないオコサマだよ？ フツーなら怖くて近寄らないって。

だからかなり距離を置かれるのも当然さ。先生にも距離置かれたからこつつ辛かったけどネ……

で、学校の態度にぶちキレたとーさんとおじーちゃんはいキナリ弁当持参の学校に転校させてくれた。

ちよっぴり別れるのは嫌だったけど、親しかった人間のああいふ態度をこれ以上見てしまうのも嫌だったから、喜んで転校したよ。

まあ、行ったトコでもやっぱりあんまり友達できなかったけどネ。しょーがないちゃあ、しょーがないと腹くくってたからダメージはあんま無かつたし。

それでも付き合いの良いのが何人か出来てくれたしね。

友達も中学、高校に上がるにつれて一人二人と増えたし、もう感謝の気持ち以外持てないアルよ。いや、ホントに。

で、オレが手がかからなくなったって事で両親とも海外に夢を追って飛び、それに合わせておじいちゃんも旅立った。

散々世話になったし（現在進行形でまだ世話になってるけど）、やりたい事やってほしかったから当然元氣に見送ったよ。

当然、最初は誘われてるけど、コミュニケーションの再構築がで^めきないし、仕事上でトラブル生みかねないから残ったけどね。

そんなこんなで悠々自適な一人暮らしってわけさ！！

あはははは…… 実際は さびしーけどネー……

どちくしょーめっ

再度ジロリと蔵を睨む。

街中じゃできないけど無機物ならできる。

前に街中でウツカリ思い出し怒りかましてしまい、居合わせたヤクザ屋さんの若い男の人が失禁しつつ泣いて謝ったのは黒歴史。

そんな凶眼を向けた蔵は平然と佇んでやる。

あの後、おじいちゃんに床の事言っただけど、そんなドアなんか知らないというし、実際に行ってみたら影も形もなかった。

全て悪夢だつと言わんばかりに……

だからどこにどう怒りを向ければよいのかサッパリ解らない。蔵そのものに罪はないだろうし。

せめてあの石喰い（仮称）の鎧があれば八つ当たりが出来たのに
つつ

どちくしょーつつ！！！ オレに普通をよこしやがれ——つつつ
つつ

あの鎧があれば——

瞬間、

キンツと澄んだ音が耳を打った。

「……ム？」

オレを中心にして音が消えてゆく。

何故か知らないがそれが解る。

——いや？ オレを中心にして……じゃない？！

オレの、オレの胸の奥から——？

| 呪力集束終了 |

| 呪力充填……終了 呪式構築開始 |

何だ！？

何が起こった？！

| 第壹式構築終了 確立展開 |

| “前鬼” 鬼動 |

唐突に頭の中に響く声。

その声に合わせて、胸の奥で渦を巻いていた何かが……

オレの胸から光を伴って、目の前に——！！！？？？

現れたのは人の姿をとった何か。

完全な人でありながら、全く別のモノ。

「――拙者 主殿の御身を守護するモノ也。

あまた 数多の害悪を討ち、矛となり盾となりて共に進まん」

ポータイルにまとめられた長く見事な赤い髪。

涼しげで切れ長の目には青い…いや蒼い瞳が輝いている。

戦国時代の甲冑と西洋鎧を足して割ったような鎧に身を包み、刃幅が通常の倍はあるだろう野太刀と思わしき刀を手にしている。

その女性……いや、少女と言ってもよいかもしれない若い女は、
太一郎の前で恭しく頭を垂れた。

「我は呪装^{もののふ}武士。

我が主よ我が殿よ。願わくばこの身に名を与え、共に生^いくる事を――」

その日、奇運の青年は生涯の相棒と出会い、力を手にする。

求めたモノのベクトルは大きく違えど、得た力は計り知れず。

歪み切った世に出でて、その刃光にて道を斬り拓く事となるのであるが……

——な、なんぞコレ~~~~~???!!!!!

今はまだ、遠く理解の彼方であつた。

巻の壱（後書き）

てな訳で、一先ずのくくりです。お疲れさまでした。

ある意味挑戦作品。実験作品で、ベースをいじれば何にでも使えた話でした。リリナの二次で使った訳ですがw

些か酔った勢いとゆーのもあって投稿してみた次第です。
いや偶々勢いだけでやってみるのも良いかもしれませんねー

年末は忙しいのでどーなるか解りませんが、そろそろミニステル達も再開するつもりです。

なににせよ、よろしくお願いいたします。

では、オヤスミナサイ。

P S . . . 因みに、この式の外見は おそらく御想像どーりですw

巻の貳

「式……か」

「はっ」

思わずそう呟くとその人は即座に相槌を打った。

うららかな昼下がり。

家屋は古式ゆかしい日本邸宅であるが、時は既に新世紀。

遠くにビルが見えるわ、電線は見えるわ、空には飛行機雲はあるわで、まるで出来の悪い時代劇みたいだ。

ただでさえ場違い感バリバリだっつーのに、唐突に声が聞こえて胸が光り、その中から女の人が見れる……なんていうファンタジー現象に慌てない訳がない。っーか慌てふためきましたよ。ええ。

実際、今だって完全には落ちちゅけ……もとい、落ち着けてない。
……噛んだのは気の所為だ。

つつても、何時もの事だろーけど表には出ていない。てか出せない。

感情を顔に出しにくくなって十余年。つまりあの石喰い（仮）と対面して杭刺の刑を受けてからそれだけ経っている。

鍛えられてしまった鉄面皮っちゅーのもあるのだけど、何

を隠そうこのオレには特殊なスキルがあり、そのお陰でパツと目には落ち着きかえった人間に見えるよーになっているのだ。

実はあの日から思考を分割できるヘンな特技が着いていたりする。

それを使つて頭の中で喧々諤々と罵り合い何だか相談なんだかよく解らない会話をしまくり、大騒ぎをした結果、今のこの心境があるのだ。

要は騒ぎまくつて力尽きたダケなんだけどな……

まあ、そのお陰で動揺しまくるという赤っ恥を搔かずに済んだ事が不幸中の幸いか。

え？ メンツが保てただけじゃねーかつて？

悪いかっ？！

如何にオレがお腹ならぬ胸を痛めて（？）生んだ（？）式神とはいつでも、おもつきり美人さんだなんだぞ？！

誰だつて美人には見栄張りたいだろ？！

自慢じゃねーけど、恐れ的眼差し以外の目で視られる事は殆どねーんだ！！

こんなに歳の近い女の子に好意的な目で見られるなんて、かーさん以外では二度目。おまけにそのもう一人は同級生の彼女ときたもんだ！

ぶつちやけ、彼女いない歴〃年齢だつ！！ 悪いかバカヤローっ
つつつ！！！！

「……っ！」

「殿？」

「……何でもない」

痛　　っ　　痛　　だだだだ……

わ、忘れてたぜ……今でも興奮し過ぎたらしたらこの様だった。
やっぱり心臓に釘が刺さるような痛みががが……

何時に無く感情的になりまくってるなあ。オチケツ……じゃない、
落ち着けオレ。

そ、そうだ、ナイス神父さまに肖あやかって素数でも数え……って、も
う片方の思考がとつくに数え始めてる！？

あ、そうかつ！！　思考分割ができるって事は、数えながら別の
事考えられるって事じゃん！！　十余年目にして弱点が明らかに！！
う　　う　　……　　今まで言い訳考えてる時しか使ってたからな
あ
……

ど、どうすべえ？

つか会った瞬間、その人の名付け親ってナニ！？
何ぞこの状況！！？？

「（ふむ……今生の主殿は中々の胆力をお持ちのようではないな）」

俯いたまま彼女はそう感心していた。

この主は無口な方なのだろう、まだ殆ど言葉を交わしてはいないのであるが、しっかりと式神である自分を受け止めている。期待した通り……いやそれ以上の人物であるようだ。

この肉体からだにしても、本来ならば長くとも半年程度で確立させるものを十年にも及ぶ時間をかけて生み出している。その手間と根気は想像を絶する。何せその間中、法力は殆ど空となつて地力のみで戦い続けてきた事となるのだから、

しかしこんな覇気を持つ御仁が、今日まで戦いを知らずにいたとは考え難い。

生まれて直の式ではあつても解る。
自分の主は只者ではない。

大体、もし仮にそれ以外の方法で練り続けたのであれば、戦いと

はまるで関係のない、日向でまどろむ子猫が如く静かで穏やかな日々を送るしかないのだ。

この主の眼光、眼力を見るにそんな日々を送ってられる訳がない。世の中はそんなに甘くないのである。

今までの主同様……いや、下手をするとそれ以上に、得体も知らぬモノとの戦いの日々を送ってきたのだろう。

その中で培ってきたものに相違ない。

でなければこの落ち着きは持てはせぬ。

『しかし何ぞこの娘？！ 武神！？ ナニそのファンタジー！
！ つか、プロポーシオンすげえ！』

（落ち着けオレ。エロに逸^{はや}るなこのタワケ。
大体、ウチにも石喰いがいたんだろう？

今更、オンミョージのアレがいたところで特におかしい事は

……）

（いやその理屈はおかしい）』

……等といった問答がある事など知る由もないし。

兎も角、彼女は座して彼の言葉を待った。
真の関係は名乗りから始まるのだから――

さて、
何か何だかサッパリサッパリなんだけど、どーも彼女に名前をつ
けなきゃいけないようだ。

ふと目を向けるとまだ面を上げずにオレの言葉を待っている彼女
の姿。

彼女彼女と言い続けるのもナニだし、『おまえ』とか言うのもア
レだ。そうだとすると名前をつけるのは至極当然の流れ。

……何だか間すっ飛ばしてるよーな気がしなくてもないけど、と
りあえず名前をつける事から始めよう。

えーと……

んと……

……待てよ？ そー言えば、オレってネーミングセンスが壊滅的
に無かったよーな……

おおっ、そーだ無かった！！ おまけに後になってそれにウツカ
リ気付いてしまうタイプ！！

更に、厨二的なセンスはないけど一般センスにも届かないという

困ったおまけも付いてるときた。幼少期から何度シートに丸まって泣いた事が。

いかん…いかんぞ…！！

解るぞ！？ どーせオレの事だ、式神だから式子とか？ いや、美少女だから式美？ 等と仏段に供えたくなるよーな名前を思い浮かべるに違いない。

つか、実際に今浮かんでるし、

おまけにこの娘、何だか知らないけどご褒美を待つワンコみたいに期待に満ち満ちてるじゃない？ わあい ドすげえプレッシャーだあ。

どんなに素晴らしいカツコイイー名前にしてくれるのかな？ かな？ と、口に出さずともそんな期待感が伝わってくるじゃないの。

だけど、持ってねーモンはどーしよーもない。

ああつ 犬を点滴マスクと名付けたり、猫にイモ太郎侍、大きく育ち過ぎたミドリガメにシルバー？と名付けた過去が蘇るっつ

このままでは涙なしには語れない命名物語が出来てしまいそうだ。

我が家で（比較的）センスの良かった母よ…！！

い、いや、この際誰でもいい…！！ 誰かつ 誰かセンサーアイデアをくれえええええーっっっ…！！

ふと、自分に向けられている主の眼差しに迷いのようなものが浮かんでいる事に気付いた。

ひよっとすると自分の実力を視ているのやもしれない。

古来より、民に仇成す魔と戦う為に己を磨き続けている者達がい

た。
その血を引く者が主であり、自分をこれだけはつきりと確立させられたのだから直系に相違ないだろう。

剣持て槍持て呪を放ち禍咎^{まがとが}を狩りぬ -

等と陽の陰にて戦い続けるのがその定めであった。

そしてその直系たるや武神の化身のような者達だと記憶している。

この若さで跡を継ぎ、自分を生み出したのだ。それは想像を絶する鍛練を送り己を高めて来たに違いない。

自分には解る。主は正に武王だ。

これはいかぬ。

紛いなりにも女の身、はしたなき事とは思うが力の程くらいは示さねばならぬだろう。

そう思い立ち、面を上げたその瞬間、

「……雷」

「はっ？」

「雷……いかづち……というはどうか？」

その名を口に出され、彼女は凍りついた。

我ながら拳動不審に思っただけど、きよときよとして首を振って名前ネタを探す。

当ったり前だけど、んな簡単に見付かったら世話はない。

何せここは庭に面した縁側。ンなところにそんな都合の良いものある訳やない。

日当たりが良好なんで、本なんか置いたら あっという間に日焼けしちゃうし。

かと言って、席を立って捜しに行く事もできない。

……ぶっちゃけ足痺れてたりする。

正座はやらされ慣れてるから平気なんだけど、ウツカリ胡坐かいちゃったもんだから即効で痺れてるのだ。

初対面の女の人（それも美人）を相手にイキナリ正座して話するのは流石に悲しすぎるけど、足を痺れさせてるのを見せるのもイヤ過ぎる。

しまった進退窮まつてる？

手持ちのカード（記憶）だけで名付けると申すか！？

あばばばばばばば……ど、どーせえと！！！！？？

えと、ええと、えつとおくく！！！！？？？

あーっっ 持ちネタが狭過ぎるっ

ひょっとして、真面目に名前考えるのって人生初めてじゃね？

小学校の時、クラスで育てたデメキンには二秒でプリン巾着つて名付けたのは良い思い出だ。

ついでにそのデメキンが死んじやったから丁寧に埋葬したのに、皆には食ったと思われたのは黒歴史だチクショーめ。

って、ンな話はどーでもええがな！！ この娘の名前えーっっっ

ネタったって、まさか車の名前とかにする訳にいかんしつ 戦闘
機のはカツコイイけど何か違うしつ

えと、えと、だったら戦車！？

だめだあーっつ 日本のは戦車は数字ばっかだーっつ つか日本の
戦車しかしらねえーっつ

そ、そっだ戦艦があつた！！

何か守ってくれるとか何とか言ってる気がするしっつ！！ 護衛
艦…いや、巡洋艦とか、そっち系のだつたら……

「……いかづち」

思わず口に出しちゃったのはその名前だつた。

「雷……というのはどうかな？」

言っちゃってから何だけど、よりによって何故に駆逐艦、吹雪型
駆逐艦の いかづちなのか？

そりゃまあ、戦争中に大活躍した艦だよ？ 結局 最後には沈め
られたけど。

他にもっと女の子っぽいのがあつたんでね？ という感じがしないで
もないし、大空のサムライ的に零とか紫電とかでも良かったんじゃない

……という若干の後悔もあったりなかったりするけど、言っちゃったものはどうしようもない。

え、と……？ 何か黙っちゃってるけど……も、もしかして怒った？！

ダメなのか？！ やっぱりオレごときのセンスではお気に召さんのか！？

彼がその名を口に出したとき、言葉がずんつと胸に響いた。

彼女には、先程から向けられている主の眼差しに不思議な色が感じられていた。

憐憫のような悲しみのような、複雑な感情が混ざっているそれは、恐らく彼女には想像も出来ないものがあるのだろう。でなければあのような表情を浮かべるはずがない。

先程も何かしら痛みに耐えるような顔をしていた気もする。その原因である何かを思い出していたのだろう。

しかし、如何なる悲しみや想いや記憶があるのに違いはなからう

が、そんな記憶があるのだろう名を汲み出してくれている。

視線を彼の目に戻せば、やはり自分に向けられている悲しげな眼差し。

これは、失ったものを自分に見ている……？

——いや？ そんな女々しさは感じられない。どちらかと言うと自分を責めている者のそれだ。

自分の責任を決して他者に押し付けようとしない、己だけで背負い込む者のそれ。

別に己は式であるのだから、身代わりを求められようも文句はない。それが主の望みであるのなら当然だ。

だが、彼が自分に向けている想いには、役割と言うより個に重きを置いたそれが感じられる。

つまり……

「（拙者に与えられたこの名には、決意が含まれているでござるな。

それも、拙者を召喚するに値するだけの……）」

元より不満はない。

このような強者、武士もののふの式となれる事に何の文句があろうか。

彼が静か発したその名…言霊を噛み締め、じわりと自分に染み込

ませてゆく。

主の言葉で驚いたのは、自分が使っている退魔の技は木気…それも雷寄りの技である事を悟られていた事だ。

何しろ髪の色は紅。

異人を体現する為にそういう設定にされたとも言われているのだが、紅く、軽甲冑に編みこんだ術式の印も相俟って、火気のモノとしか見られる事はまずない。

実際には火防の為の印であるが、それでも刃を交えない限り火気と感じられないようにとの思惑もある。

だが、彼は見抜いた。

ただ見据えただけで見抜いたのだ。
何たる眼力であろう。

しかし視抜かれた故か、よほど相性が良かったのか、その言霊^名は忽ち身体に馴染んでゆく。

如何に高度な呪式で紡がれた式神であろうと、名を持たずしてしつかりとした我は保てない。

名を置いてもらい、初めて其れが其れとなるのだ。

無論、不満なぞ浮かぶ事もあるはずもない。

……いや、式そのものが木気なので魂の名に近いのだから当然なのだろう。

「護りの名として考えたのだが……気に入ってもらえか？」

「はっ」

気に入ったところではない。身に余る光栄だ。

この身、この心に染み入る素晴らしい個の名である。

「身に余る光栄。正に感動に打ち震えてしまったでござる。

我、この身今生より雷と成らん。

我、前に立ちし式《前鬼》にして共に戦う式《戦鬼》也。

この身が砕け灰塵と化そうとも主の刃と成りて戦う事を誓わん」

ゆっくり、そして強く与えられたその名を噛み締め、心からその名を受け入れて自分の呪式に練り込ませてゆく。

嗚呼……と感動に打ち震えた。

半分繋がっただけで解る。

有象無象の力自慢のそれではない。研磨し更に研磨して必要最小の法力のみで戦い続けた者のそれを感じるのだ。

無論、力の器の大きさは歴代でも小さい方だろう。

普通人より多少はある程度と称しても言い過ぎではないだろう。

だが、単純に力が足りない……のではない。

力を使っていないのだ。

途轍もない効率の高さで呪式を編み、それを使っているに相違ない。

でなければ、自分を編み出す事など不可能なのだから。

ほんの微かに残っている自分の先人の記憶の中でも、自分ほど細かく式を編まれた者はいない。

言わば、先人らは藁束わらたばで編んだ莫座もくざのようなもの。彼女らに比べれば自分は絹糸で織られた反物だ。

人との差異が殆どないくらいなのだから。

「主よ。」

偉大なりし我が殿の御名をお教えくださらぬか？」

さつきから気になってるんだけど、殿ってナニよ。
殿ってアンタ……オレは別に軍団作ったり映画監督する気はないよ？

あ、でも良く考えてみたら自己紹介とかやってないじゃん。どんだけ慌ててたのよオレ。

まあ 普通に考えたら家宅侵入されたよーなもんだし、この娘……って、雷か。雷って不審者そのものなんだけどね。イキナリ謎の出現したし。

でもオレが生み出したっポイし。理由解んないけどさ。

あー……これもやつぱあの杭の所為かなー 胸の奥から声したし
なー

ん？ あれ？ ひよつとして杭を打ち込まれて生んだって事だから……レイプされたってコト？！

ぎゃあああつつつ！！！？？ 気付かなきゃ良かったああああー
つつつ！！！！

サクランボ失う前に菊が散ったってか！！！？？ 勘弁してよつつ
わああああああああんつつ

って、落ちて着けオレ！ 今の状況に何のカンケーもないわあっ！！

「……殿？」

はっ

いかんいかん イロイロあり過ぎて我を失ってたヨ。

と、兎も角別の事に集中するんだ。目から出た汁は心が冷や汗掻
いただけだっ コンチクショーツツツ

「太一郎。」

鈴木 太一郎だ」

やけっぱちのままそう名乗ると、雷はオレの名を噛み締めるように小さく呟き、

「御名を御教え下さり、名を手向けて下さり感謝の極みでございます。

我 雷。主が為にこの身この命果てるまで、その全てを捧げ尽くす事を誓わん」

そう、聞き捨てならないとんでもないセリフを言っちゃってくださった。

……って、オイオイ！！！？ ナニ言っちゃってくれちゃうの！！！？

ナニその重々なセリフは！？

と、やっぱり顔に出せないまま、慌てふためいて問い詰めようと腰を浮かせた正にその時、

- 呪式契約 終了 -

- 太一郎、雷 間、径路開放 -

- 侍従呪式……固定完了 -

- 魂魄経路 構築終了 -

- 前鬼“雷”登録 -

- 呪式儀 全行程終了 -

胸の奥からこんな声（音？）が辺りに響き、彼女のオレの間に一本の光る糸みたいなモンが出現し、瞬いたかと思った瞬間、それは目に見えなくなった。

……ひょっとして……ナニが取り返しの付かないコトが起こっちゃった？

アレ？ 何か詰んだ気がするんだけど……

——まあ、兎も角。

「殿？」

「……いや、何でもない。
それより上がってくれ。跪かせて話をする趣味はない」

「御意」

そんなこんなで混乱しつつもオレと雷との共同生活が始まったのだ。

べ、別に家族が増えたからって、特に喜んだりしてないからね！
？

巻の式（後書き）

読み易さを高める為、一話一話を短目にするつもりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7627z/>

S A M L I O N ~まじっくナイトはご機嫌ナナメ ~

2012年1月12日19時47分発行